

「京都基本構想」に係るパブリック・コメント結果

1 意見の募集期間

令和 7 年 7 月 1 4 日（月）～ 8 月 1 4 日（木） 計 3 2 日間

2 構想案の周知方法

- (1) 市役所庁舎案内所、情報公開コーナー、区役所・支所等本市所管施設、本市主催・共催・後援イベント等で、冊子及びチラシを配布するとともに、京都市ホームページ、特設サイト「みんなの理想京 ideal Kyoto」にも掲載
- (2) 市民しんぶん 7 月 1 日号特集面に掲載し、市内全域に周知
- (3) 各種メーリングリスト・SNS 等を活用して周知
- (4) インターネット広告を活用して市域外に周知
- (5) 京都市未来共創チーム会議や関係団体、関係行政機関を通じた周知
- (6) 大学・高校の授業・ゼミ等において出前パブリック・コメント等を実施

3 募集結果

意見総数：1, 5 1 4 件、意見者数：5 8 4 人

(1) 項目別（件）

構成	件数
序文	209
第一章 京都基本構想策定の背景	93
第一節 世界文化自由都市宣言―世界史を担うまちを目指して	35
第二節 京都市基本構想―21 世紀の到来を見据えて	38
第三節 京都基本構想の策定―「都市の理想」に立ち返って	48
☑なし	4
第二章 京都のかたち	123
第一節 悠久の自然との共存の中で	46
第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり	45
第三節 節度と矜持に基づくひらかれたまち柄	39
第四節 世界から敬愛される学藝の府	40
☑なし	6
第三章 世界・日本・京都市のいまと未来への課題	140
第四章 わたしたち京都市民がめざすまち	372
第一節 (1) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける	76
(2) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける	74
(3) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる	60
(4) 平穏と静寂のもとで自己と世界と深く向き合える	45
第二節 (1) 謙虚に自然と関わり続ける	43
(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る	51

構成		件数
	第三節（１）多層的でゆるやかなつながりが続く	62
	（２）支え合いの中で日々の生活を営める	51
	（３）ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える	64
	☒ なし	12
第五章 わたしたち京都市民のこれから		140
未来への問いかけ		92
策定後、様々な方々に広めていくための活用の仕方		201
その他		144
合 計		1,514

※ 1つの意見で複数の項目に☒がされている場合があるため、各章の意見数とその内訳となる各節の意見数の合計数が一致しない場合がある。

(2) 意見者数の内訳

① 年齢別（人）

～19歳	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	無回答	合計
158	120	52	49	49	35	19	5	97	584

② 居住地別（人）

京都市内	京都市以外の市区町村	無回答	合計
335	116	133	584

③ 回答方法別（人）

意見募集フォーム	出前パブコメ	メール、FAX、郵送等	合計
367	190	27	584

(3) 出前パブリック・コメントの実施状況

学校等	回数	
大学	19	京都大学②、京都工芸繊維大学①、京都産業大学①、京都橘大学①、京都府立大学①、嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学①、同志社大学①、佛教大学②、龍谷大学④ 京都光華女子大学②、同志社大学①、佛教大学②
高校	4	市立開建高校、市立奏和高校、府立洛西高校、府立鴨沂高校

その他団体等	8	SOI Community（京都産業大学学生団体）、U35-KYOTO、京産大ボランティアセンター学生スタッフ、同志社 SALT、U35-SAPPORO、環境政策局市民対話会議、男女共同参画市民会議運営懇談会、 <u>KYOBI 建築（京都美術工芸大学学生団体）</u>
合 計	31	

※ 下線の大学等は、意見募集開始前（7月8日（火）～11日（金））に、京都基本構想に係る講義やグループワークを実施するとともに、パブリック・コメントの協力依頼を行った学校等

（参考）グループワークで出た意見：1， 139件

市内大学や高校のゼミや授業等において、「あなたが住みたい、関わりたいと思うまちってどんなまち？」をテーマに、グループワークを実施した際に学生等から出された意見。

4 御意見の要旨

別紙のとおり

パブリック・コメントでいただいた主な意見

1 「序文」に対する意見（209件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 「このまちを重層的に彩る各時代の史跡も、・・・・・残存してきた」とあるが、残存するという表現は、消えゆくものが残ってきたという消極的な評価という印象を与える。そういった面もないわけではないが、ここでは「継承され発展してきた」とする方が適切である。
- ・ 京都市内でも 1945 年に馬町や西陣で空襲による死者が発生しており、「幸運にも近年の戦禍を免れてきたこれらの人間的遺産～」という部分について、「幸運にも」や「免れて」という表現は見直したほうが良い。
- ・ 「共存」という言葉が使われているが、「共存」は、異なるものが争わずに一緒に存在することを指し、「共生」は、異なるものが互いに影響を与え合い、利益を享受しながら共に生きる状態を指すため、「共生」の方が適切ではないか。
- ・ 「京都市と人類社会双方の恒久の平和と共存」とあるが、京都市も人類社会に含まれるので、修正すべき。

○ その他の御意見

- ・ わたしたち京都市民は、平安期から脈々と続いてきた伝統ある文化を、継承しているという自負を持たなければならない。そこに培われた精神的な経験値が現在に息付き、新たな息吹が芽生えている。
- ・ 京都というまちの歴史性、自然感、人と人とのつながりをもう一度見つめ直して、大切にしていこうという考えに共感し、京都らしいと思った。
- ・ 序文だからかもしれないが、聞こえのいい理想論だけに見える。具体的に何をしようとしているのかわからない。
- ・ 矜持、恢復など難しい用語ではなく、安易な漢字にして読みやすくしてほしい。

2 「第一章 京都基本構想策定の背景」に対する意見

第一節 世界文化自由都市宣言—世界史を担うまちを目指して（35件）

○ その他の御意見

- ・ この節を読み、「都市は、理想を必要とする」という言葉に強く心を動かされた。京都市が都市の理想を掲げ、市民の手でその実現を目指してきた歴史は、とても先進的であり、誇るべきものだと感じた。文化や歴史を守るだけでなく、それを通じて世界に貢献するという視点は、単なる観光都市とは異なる京都の本質を表している。こうした理念を、今の若い世代にも丁寧に伝えていくことが大切である。
- ・ 世界文化自由都市宣言の内容があまり分からないため、この節の理解を深めるためにも世界文化自由都市宣言について詳しく知りたい。
- ・ 京都は日本史的視点だけでなく、世界史的視点で見ても重要な都市であると考えます。そのため、この文章にあること、覚悟はとても重要である。
- ・ 世界文化自由都市宣言は京都市民の羅針盤になる良い指標だと思う。
- ・ 世界文化自由都市を目指すうえで、多様性への対応や、外国人観光客・居住者との共生の具体策をより明確に打ち出す必要がある。
- ・ 世界文化自由都市宣言は、初めて耳にした。生まれる前から大事にされている理念とのことだが、市民が大事にしているのであればもっと教育の中に浸透していると思う。
- ・ 世界文化自由都市宣言があることを、はじめて知った。とても素敵な文章で、理念にも共感するが、今の京都市が「優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市」になっているかという、残念ながらそうではないと感じる。もっと新しいクリエイティブを生み出すまちになってほしい。
- ・ 世界史を担う街を目指す必要はないし、強要されるべきではない。いったいどれくらいの市民がそのような意識を持っているのか。

第二節 京都市基本構想—21 世紀の到来を見据えて（38 件）

○ その他の御意見

- ・ 京都市民の 6 つの得意技をもっと細かく説明することで、再認識する機会付けになると思う。
- ・ 主語が市民による地域づくりを意識していて良い。
- ・ なぜ「わたしたち京都市民」が主語になっているのか。
- ・ 京都は学生のまちであるし観光客も多く、地元の人だけでなく、外部の人も重要な役割を果たしている地域だと思う。京都市民の根底の価値観があるならばもっと明確に外部の人にもわかりやすく示して欲しい。
- ・ 京都市基本構想について、「反省」とまでは言わないが、「総括」が必要ではないか。

第三節 京都基本構想の策定―「都市の理想」に立ち返って（４８件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 「今般、2011年の地方自治法の改正によって基本構想の策定義務が廃止されたにもかかわらず、…本基本構想の策定に至った…」のくだりは若干違和感がある。2011年の地方自治法改正は、単に当時各種行われていた法律に基づく地方団体への義務付けを廃止することが主な趣旨であり、法改正にかかわらず当然各市町村において基本構想は策定されるものだと考えられていた。「にもかかわらず」という表現はやや大げさな印象を持つ。
- ・ 「…四半世紀の間、人類は、」のあとに「気候変動（地球温暖化）」を必ず記載してほしい。

○ その他の御意見

- ・ 策定の背景を地方自治法の改正にも触れながら、策定義務がなくなってもなお京都市には基本構想が必要だということが分かりやすく書かれていると思った。
- ・ AIやグローバル化など、現代社会の情勢や技術の変化に合わせて社会の在り方を考える姿勢が非常に良い。
- ・ 都市の理想は絶対に必要とされる、都市の理想がない都市は衰弱し、理想がある都市は成熟していくと思う。都市の理想は変化していくものであり、すばやく創造し行動する事が大切だと思う。
- ・ 上位の世界文化都市宣言という都市の理想に立ち返り、今後の四半世紀の在り方の展望について書かれているので、原点に戻り未来に向けた意思が感じられ、良かった。
- ・ 「京都市基本構想」→「京都基本構想」ということで「市」が削除されているが、その理由を第三節では触れたほうが良い。
- ・ 地方自治体の改正や世界文化自由都市宣言など、理解していないとこの文が読めない情報が多く、読解が難しいと感じた。
- ・ 前構想から現構想への接続が弱いように感じた。京都市としての25年間の振り返りの記載が必要ではないか。

3 「第二章 京都のかたち」に対する意見

第一節 悠久の自然との共生の中で（４６件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 1889年の時点では、京都市は京都府知事が京都市長を兼ねる状態（市政特例）であり、確かに区画として存在したもののそこに自治が存在しているかどうかは不明である。京都市が自治記念日の式典をやめるのであれば、市政特例が廃された明治31年10月15日も記載されてほしい。
- ・ 「持続可能な開発」に言及されている。非常に重要な概念であり、「といったこと」「社会的に流行」という言葉で、それを単にはやり言葉のように扱う姿勢は、この概念を尊重してきた分野を軽視するように見える。「といったこと」は削除し、「社会的に流行」は「社会的に浸透」としてほしい。

○ その他の御意見

- ・ 京都市は自然多い部分と歴史的建造物もありつつ、人々が生活しやすいようなスーパーマーケットなど生活と自然が共存している。その部分を大切にしてほしい。
- ・ 自然と共存していく事が、大事だと考える。
- ・ 持続可能な開発という言葉は、「社会に流行する遥か以前から、多くの先人たちが人間と自然の不可分と一体性に基づく共存を志向し、これを体現してきた」とあるが、どのように志向し体現していたのか気になった。
- ・ 昔に立ち戻り、排他的な状況を確立することでしか京都の文化や自然は守られない。
- ・ 「この自然観は、改めて世界に提示していくに値するだろう」とあるが、現在の市民がこのような自然観を持って暮らしているかは疑問。人間と自然との不可分性や共存を志向した先人達がいたことには同意できるが、現在は余り志向されていないように思われる。

第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり（４５件）

○ その他の御意見

- ・ ITなどの発達により、むしろ生身の人間のつながりが重視されていると思う。さらに言えば昭和のかつてより、人権意識が高まっていると思われ（例えば、暴と称する暴力がいけないことになるなど）、人と人との連なりがより重視されていると思う。
- ・ 悠久の自然との共存、歴史・文化の重層性、学藝の府としての位置づけなど、京都の魅力を丁寧に描写している。
- ・ 歴史と文化を大切にすることが京都で生きることの意味だと思う。
- ・ 今では盆踊りを廃止する都市がある。しかしこの文章を読んで、政治や宗教、文化など様々な歴史の連なりが今の人の連なりにつながっており、それを重要視する必要があると思った。
- ・ 京都には老舗がたくさんあり、有名でなくても何代にもわたって商売や職人の技を守っている家がある。職種も多岐に渡るため、個人商店を大切に、寛容に見守る行政であってほしい、規制、条例があるのは理解するが、杓子定規に当てはまらないケースもあるのでそこはケースバイケースで対応願いたい。
- ・ ビルやマンション、ホテルといった現代的な建物が増えすぎていて多くの人々が求める京都らしい建物や景色が失われることが残念だ。
- ・ 新たな文化の創造よりも、過去の文化遺産の継承に力点を置いて書かれているように読めるが、前者があってこそ持続的な繁栄につながるのではないか。
- ・ 「歴史」や「文化」という言葉が非常に多く用いられているのが気になる。今後も守り、継承していかなければならないものがたくさんある一方で、「文化」や「歴史」から長らく排除・分断され続けている人がいることにもしっかりと向き合っていかなければならない。
- ・ このまちの歴史の部分の解像度が低過ぎる。行政の一部や有識者だけでなく、幅広く市井の人に聞き、時間をかけて作り上げるものではないのか。

第三節 節度と矜持に基づくひらかれたまち柄（３９件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 「日本食」は「和食」の方がよいのではないか。ユネスコ無形文化遺産でも「和食」で登録されている。

○ その他の御意見

- ・ とてもよく考えられていて、共感できる点が多かった。
- ・ 学術機関が多いことについて、もっと民間との交流やアウトリーチ活動を含め、そういった活用、オープンさがあると良い。
- ・ 鴨川の河川敷は人々が猛暑の中でも自然に集う場所であり、日常を過ごす場所であるため、京都市を説明するうえで欠かせないものだと思う。
- ・ 最後の段落は、いささか情緒的に思う。また、このような風景、人との関係性は京都に限らず、他の都市にもあるところにはあるのではないか。140 万人を超える人口を抱える都市としては稀有なものということなのか。
- ・ 注釈を読まないで理解しづらい言葉を書かれても学生からしたら読む気もなくなるし、次を読もうと思わなくなってしまう。
- ・ 子供の頃、春はお花見、秋は紅葉狩りと四季の移ろいを身近に感じていたが、最近の京都は、生まれ育った時と乖離があり、ただ騒々しいだけの外国人が闊歩する街になった。最近では外出もためられる。なんとかしないと京都は京都でなくなってしまう。
- ・ 節度と矜持に基づくひらかれたまち柄がどういう状況をいっているのか、多くの人がイメージできるのか疑問。節度と矜持がひらかれたまち柄を生むのか。こういう疑問が湧く、読んですんなり頭に入らない時点で、多くの市民から遠いビジョンになってしまうのではないか。あえて、考えさせようとしているのか。節度と矜持がもたらすものは、ある種の排他性、よく言えば、良いものを見極めて受け入れる目線ではないか。

第四節 世界から敬愛される学藝の府（４０件）

○ その他の御意見

- ・ 京都の芸術といえば、寺社城のことをイメージするが、それだけでなくそこに対する師弟や職人がいてこそ京都の芸術が成り立っているということがわかった。
- ・ 京都市に数多くある民俗行事・民俗芸能を保存、継承している人々に光を当てていただきたい。少子高齢化社会の到来や人々の考え方が多様化している現代、こうした民俗行事・民俗芸能を保存している人々は、その後継者の育成に苦勞されている。
彼らに基本構想の象徴になっていただくことで京都市に根付く行事・芸能の良さを改めて市民の皆様に知っていただくことができるとともに、当事者のモチベーションアップにもつながる。子どもたちの目に留まることもあるだろう。そうすることで、民俗行事・民俗芸能を自らもやってみたいという思いを喚起することができ、後継者の育成にもつながっていく。
- ・ 話の内容が大きすぎると思う。京都市が世界にとって有数の貴重な財産であることには間違いないが、京都がこうあるべきだとする理想像に対して人類社会に対する貢献への可能性の明示は抽象度を高めていると思う。
- ・ 京都学藝衆という謎の固有名詞が登場し、この後も様々なところで、わたしたち京都市民とは違う特別な存在のように語られるが、これが何を指しているのか不明。京都市民を先導する特別な人がいるというのであれば、その定義と役割、いったいどこの誰なのかをはっきりするべきだ。
- ・ 師弟、職人、愛好家に加え、農業・林業の担い手も紹介してほしい。記載が全般的に上京・中京・下京のことに偏っているように感じる。

4 「第三章 世界・日本・京都市のいまと未来への課題」に対する意見（140件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 外部からの新規参入による弊害について述べられているが、記載を増やすと排外的なイメージが強くなりすぎる。京都はそもそも 1000 年来外部から絶えず文化を受け入れ、育み、新規参入者の弊害と向き合い、協力し、乗り越えてきた。
- ・ 自然との関わりが希薄化とありますが、自然の劣化や気候変動などにより、市民生活への直接的影響（豪雨災害、猛暑など）が生じているところまで言及が必要である。
- ・ 「戦争や紛争の悲惨は発生・持続」という表現に少し違和感があるので、「悲惨な戦争や紛争が、発生・継続」としてはどうか。

○ その他の御意見

- ・ 世界的な気候変動、人口減少、高齢化、経済不確実性などの課題が整理されていることは、京都市が直面する現実を正しく認識している点で評価できる。
- ・ 人口減少や産業の後継者不足、自然災害など、京都市が抱える多くの課題が網羅的に整理されており、現状への的確な分析がなされていると感じた。特に、若年層の流出や学生数の減少については、将来的にまちの活力を大きく左右する深刻な問題だと思う。
- ・ 未来を見据えるとき、課題を「危機」として捉えるのではなく、「変化の入口」として捉える視点が必要だ。世界の中で、持続可能で誰ひとり取り残さないまちとして、京都が果たすべき役割は決して小さくない。
- ・ 京都市の経済を発展させていくという文の中で、京都の伝統的な文化に対する文言があまり入っていないため、取り入れて欲しい。
- ・ 京都は歴史と文化の宝庫だが、観光客増加による環境や生活の質への影響も懸念される。特に市内に住んでいると、観光客のマナー啓発、地域の暮らしは重要な事項であり、観光とのバランスをしっかりとってほしい。
- ・ 京都市の重要な産業のひとつが観光であることは言うまでもなく、それを否定するものではないが、基本は地域住民の生活があり、そこでの生業があり、地域コミュニティへの参加があって初めて成り立つもの。「いまと未来への課題」の章であるからこそ、総論から少しでも踏み込んだ具体的な言葉があっても良いと思う。
- ・ 根本的には、京都が魅力あるまちとして在り続けるには、新しい企業や産業が必要となる。その核となる若い世代の起業家・経営者・アトツギの応援に積極的になってほしい。観光公害なども勿論解決すべきだが、現状解決したとして、市民の満足度は上がるかもしれないが、根本的な都市としての課題解決に寄与しない。

5 「第四章 わたしたち京都市民がめざすまち」に対する意見

第一節 (1) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける（76件）

○ その他の御意見

- ・ 他の地域のつながりや文化など積極的に取り入れるということがすごく良いと思った。京都は学術都市なので、交通などの様々な問題において、大学などと連携して行うことで互いに良い影響を及ぼすと思った。
- ・ 京都という独自の歴史・文化をはじめ様々な要素を有するまちが、立ち止まらず更に進化を続け「本物（ほんまもん）」を磨き上げていくという点が非常に素晴らしく感じた。
- ・ 「不易流行」という言葉は非常に京都に適したフレーズである。伝統や文化という本質はそのままに新味を次々と取り入れる姿勢こそが京都の発展に寄与していると思うため、「不易流行」の考えは周知いただきたい。
- ・ 伝統や文化が市外の人に支えてもらっている部分があると思う。市内の人が関われる、また、その深いところまで関われる機会をつくっていけば良いのではないか。
- ・ 今ある文化を本物の技術を追究し続けるのも良いですが、京都の文化は古くから存在するもの。世界の文化と交流しすぎてしまえばせつかく1200年間守ってきた文化が失われてしまうのではないか。
- ・ 歴史・文化を生かすとともに、京都市が創出する先進テクノロジー、先端技術をどう生かしていくかという点について、もう少し記載があっても良いのではないか。
- ・ 第三章で挙げられた課題意識との落差を感じる内容だ。本構想において「ほんまもん」とされているモノゴトの担い手をどう育てるかということについて、鋭く問題が指摘されている。しかし、それに応えて京都市のこれからを打ち出していく第四章に、この深刻な問題に対応する構想は読み取りにくかった。
- ・ 本物(ほんまもん)がどのようなものを指すのか不明瞭に感じた。
- ・ 「ほんまもん」を追究される方もおられると思うが、多くの京都市民は「追究」まですることはなく、「大切」にする程度なのではないか。

第一節(2) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける(74件)

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 日本、世界に羽ばたいてもらい、その経験を京都に還元してもらえそうな視点、つまり何年後かに戻って来たいと思ってもらえそうな場とすべきで、人材を輩出するという観点を盛り込むべきではないか。

○ その他の御意見

- ・ グローバル化が進む世の中で京都という都市を拠点として、世界の文化と日本の文化の良い部分を融合させ、さらにより都市になることが出来ると考えた。
- ・ 京都の文化と海外の文化、どちらもそのまま選んでしまうと必ず意見に違いができ、対立が生まれてしまう。それを防ぐためにも京都らしさを残しつつ、海外の文化と共存できるような新しい京都の文化が必要だと感じた。
- ・ 世界の文化と交流し、新たな文化を創造することは、それを継承する意味としても最も大切なことである。
- ・ 「新たな文化を積極的に受容しながら、京都市の多様性と包摂性を高める」の一文で、京都という文化を継承していくうえで、多様性は必要なのか。
- ・ 世界の文化と交流としているが交流する場所が少ない気がする。もっと作ってみても面白いと思う。
- ・ 京都市民の生活と京都の観光が関わっているイメージがあまり無いため、この項目だけ達成が難しそうに思えた。確かに観光業等を提供する側であればこの項目は達成しているようであるが、そうでない市民が圧倒的に多いし、オーバーツーリズムによる被害もあるため、寧ろ課題である点が多いと感じた。
- ・ 世界の文化と交流していくことはもちろん大切なことであるが、京都は京都の文化をこの先も大切にしていけることが必要だと感じた。

第一節 (3) 「夢中」と「感動」に溢れ、学び続けられる（60件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・「子どもたちや若者」では「子ども」のみ複数形であるので「子どもや若者」でよいと思う。

○ その他の御意見

- ・ 歴史や文化に触れる機会が多いというのが京都の魅力のひとつであると思う。生活しながら学ぶことができる点が良いと感じた。
- ・ 学び続けるということは一見難しく聞こえるが、自分の興味関心のあることならできそうだと思う。これからの未来でも必要とされる部分ではないか。
- ・ これから未来を担っていく子どもたち等に対して、あたたかい言葉をかけているようで良かった。
- ・ 様々な分野を追求できれば、自分自身だけでなく、街全体でも新しい発見を得るきっかけになると思った。これによって、国際的にも協力し合うことが増え、お互いの国や地域の文化などを知り尊重し合う関係が築けると感じた。
- ・ 「国籍、文化圏などを超えてともに学び合える」という文が印象的だった。近年、インバウンドの影響で「海外の人が多すぎる」と嘆いてしまっているが、本来はもっと嬉しいことであるはず。海外の人にマイナスのイメージをもちたくないし、地元住民はもちろんととても大事だが、京都（日本）に住む外国人が疎外感を感じるような社会にはなってほしくないと思った。
- ・ 大学が多く、教育に力をいれているからこそ、「まち全体をキャンパス」というのがとても良いと思う。
- ・ 学生のまちなのに、京都に残る学生が少ないのは、京都の文化に興味をもつ人が少ないからではないか。
- ・ 「特に、わたしたちの京都市の未来を担う子どもたちや若者が、このまちの自然や歴史と文化に触れながら豊かで鋭敏な感性を育み」の記述があるが、幼児期の感性を育むためには、保育環境の中にも自然、歴史、文化に触れあえるよう取り組んで欲しい。

第一節 (4) 平穏と静寂のもとで自己と世界に深く向き合える（４５件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 「戦争や紛争の発生や持続」という表現のうち、「持続」については「継続」あるいは、「未終結」といった表現の方が良いのではないかと。
- ・ 京都市は人類社会の一部ではないかと。

○ その他の御意見

- ・ 自己の在り方について自問自答し、一人で考え抜くような内向きの思考をイメージしていたが、実際はもっと外向きの、他者や世界と関わるような、グローバルな思考を掲げる目標であることを知った。
- ・ 目的がなくともふらっと立ち寄り、自己内省できるような場所があれば良い。名所でなくとも各々の人にとって大切だと思えるような「個人にとっての名所」が点在するまちが理想だ。
- ・ 自然、歴史、文化を通して、人生の在り方や生き方を考えるきっかけを持ちながら、様々な問いをもつことが大事だと思った。
- ・ とても共感した。京都出身の私にとって、京都はまさに静寂さをたずさえた地域だと思っている。例えば、祇園祭のお祭り騒ぎのなかにも上品さのような雰囲気がただよっている。京都の大きな強みだと考えるので、この先の未来でも重視していきたい。
- ・ 自分たちの暮らしと世界との向き合いや尊重について書かれているが、もう少々分かりやすい文章が良い。深い静寂や人間の儚さと脆さなど、あいまいな説明だと感じる。
- ・ 平穏と静寂のもとでの生活とあるが、京都は観光客を含めて人が多く、どのように対策していくのか。
- ・ 京都のまちに静けさというイメージはあまりなく、どちらかというと華やかなイメージがある。京都市民には穏やかな人が多いイメージもあって、平穏という言葉だけでしっくりくると思った。

第二節 (1) 謙虚に自然と関わり続ける（４３件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 現在まさに全世界が直面する自然への脅威の大きなものが、気候変動であることを考え、その対応をまず京都で取り組んでいくという意味で、「気候変動」や「地球温暖化対策」などの文言を入れることが必要ではないか。
- ・ 環境のところには、なぜ「京都議定書」というワードが入っていないのか。敢えて外しているのか。入れるべきだと思う。

○ その他の御意見

- ・ 「自然と謙虚に～」というのが少しイメージしにくいことがあったが、自然の中で暮らしを享受しつつ、「生かされている」というイメージは多少あった。読んだ上でのその理解は深まった一方で、関わる形や程度についても深く考えてみたいものだと感じる。
- ・ 京都は自然の多いまちだということ、そしてそのことが私たちの文化を形作ってきたものであることについて、あまり広く知られていないのではと考えた。それは則ち私達と自然との一体性を軽視してしまうことにつながってしまうのではないかと考えた。
- ・ 歴史ある食文化や職業も、元は自然の恵みからであるものが多いが、近年自然と生活が離れつつあるため、自然を活かした観光や生活をもっと取り入れ、京都市の伝統を守っていければ良いと感じた。
- ・ 「体感し体得できる機会の創出」とは具体的に何を想定しているのか（市が田植えなどのイベントを実施するなど）。
- ・ 人の関わりによって保たれてきた自然との新しい関わりづくりについて、課題として提示してはどうか。
- ・ 恵み豊かな京都の自然は、人が利用しながら維持されてきたという前提に立ち、自然との新しい関わりづくりが課題であることを提示するべき。

第二節 (2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る（51件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 人類が引き起こした気候変動を解決する方向へ進むことへの決意を表明するべきではないか（降りかかってくる災害に対応するだけでなく）。
- ・ 京都議定書が締結されたまちとして、これからの四半世紀に避けて通れない気候変動の影響に対しても言及すべきではないか。
- ・ 全体にわたって、地域企業を想定した文章が少ない。「災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る」については、地域住民、地域団体、市民団体と記載があるが、ぜひ地域企業を入れていただきたい。

ここは災害などがテーマだが、災害克服の主体として地域企業に触れていただくことで、地域企業が京都の一員であることを意識付け、より地域に目を向けるきっかけになればと思う。

○ その他の御意見

- ・ 歴史ある文化財や伝統が千年以上、守られ受け継がれてこられた背景には、先人の知恵や工夫、そして守り続ける意思があるからなのだと改めて感じる事ができた。これからも守り続けてほしいと感じた。
- ・ 京都市でかつてたくさん発生したききんや感染症を基にしてこれからの未曾有のことにも対応していくということは、「京の都」だからこそでき、それが自・共・公助という防災の基本プラス京都だからあること（文化など）によるものと改めて考えられた。
- ・ 京都市民へのサービスは当然ながら、1000年以上に渡って日本の中心に有り続けている都市として、災害時における他の都市への応援体制の構築など次の1000年（は言い過ぎかもしれないが、100年くらい？）を見越した、人員、組織、機材の充実化を図って欲しい（地震は免れないが、津波などの被害は限定的と思われるので、いざ津波等の被害があったときの中心的な役割を果たし続けて欲しい）。
- ・ 過去からある京都を大切にし、つながりがあれば、乗り越えやすくなると思うが、災害や感染症は日々姿・形がかわりつづけるものであり、私たちも変わり続ける必要があるのではないかな。
- ・ 京都市民が培ってきたしなやかさとは具体的にどのような性質を指すのか、疑問に感じた。様々な災害、感染症を市民の努力や文化の力によって乗り越えてきたことに疑う余地はないが、しなやかさという表現は正確さにやや欠けるのではないかな。

第三節 (1) 多層的でゆるやかなつながりが続く（62件）

○ その他の御意見

- ・ 「多層的」という言葉が市民だけでなく、他県の学生や外国人観光客など多様な人々が関わり合うまちである京都らしさを十分に表していると感じた。
- ・ 京都はかなり地域コミュニティが強く、結束も強いと思うが、若者や外部からの人はそのコミュニティになじめない、もしくは必要以上につながりをもちたくない考える人も多いと思うので「ゆるやか」がキーポイントになる。
- ・ 地域のお祭りや地蔵盆などの地域での関わりがかなり減っているように感じている。取組をなくすことは簡単だが、次世代のためにも何とか残していく方法を考えていくべきだと思う。
- ・ 「ゆるやかなつながりが続く」という表現が素敵で良いなと思った。多彩なつながりを多層的に織り成すことによってより歴史や伝統を守り、新たな大きなつながりへとつなげていくことができるのではないかな。
- ・ まちが継続、継承していくにはその地域での文化や伝統行事が不可欠だ。ただ、若者はそういったことに年々興味を失っているように感じる。
- ・ 観光客に感謝と敬意を抱くとあるが、どのように実現を目指していくのか気になった。
- ・ 現在、人と人の関わりがなくなっているように感じるが、人とのつながりは欠かせないものだと思う。観光客の方々とのつながりも大切だと思うが、市民同士のつながりも意識しておくべきだと考える。
- ・ 「ゆるやかなつながり」と聞くと「浅いつながり」を想像してしまい、良い表現なのかどうか分からなくなってしまった。「ゆるやかなつながり」という言葉の説明の必要性を感じた。
- ・ 市外や府外・国外の人に対する京都市からの敬意が述べられていたが、京都市からの一方向からの敬意だけではなく、京都市外の人や京都市というまちやそこに住む人に対しての尊重・理解を持つべきという旨が伝わると良いと思う。

第三節 (2) 支え合いの中で日々の生活を営める (51件)

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 支援における役割の循環について言及があるが、「普段から」という役割の固定化をイメージさせる言葉を入れる必要はないと思う。
- ・ 第二段落で、「支援を担う」という表現が仕事を連想させる。ここで言いたいのは、お節介に近いことではないか。そのため、「このまちには、支える人たちと支えられる人たちが場面や事情に応じて普段から役割を循環させながら」と修正すべきではないか。

○ その他の御意見

- ・ 誰ひとりと書いているところから幅広い年齢層や、規模の広さに気づいた。一方的な支えでなく、相互で支え合う、立場や役割を変えてというのが誰ひとりにつながっていると思った。
- ・ 地域で通学中の子どもなどにおかえりなどの挨拶があり、地域でコミュニケーションがとれるあたたかい街にしたい。そうすることで犯罪の低下などにもつながると思う。
- ・ 福祉の制度があったとしても、その制度に教えてくれる人がいなかったら、利用しようという考えにはならないし、実際にその制度を利用したという情報がなければ、不安がある。制度を教えてくれる人、情報をくれる人など、色々な人の支え合いが福祉には必要である。
- ・ 特に、子どもが住みやすく、子育てのしやすいまちであってほしい。京都は長い歴史があり、文化が大切に守られてきたまちであるため、それらをこれから守ってつないでいく子どもや若い世代が、ここに住みたいと思えるようなまちになってほしい。また、子どもの意見を聞く機会を増やしてほしい。
- ・ 大学生になってから地元を離れ一人暮らしを始めたが、何かで困った時に頼れる人がいるということは安心にもつながると、一人暮らしをしてより実感した。そのため、近所の人たちとつながりを持てる機会があると良いなと思った。
- ・ 多層的な支え合いについては、弱さのもつ力を含めたケアの複雑性、全ての人が何かしら持っている生きづらさや弱さを受け入れ支え合う地域共生社会の本質を取り入れ、「笑顔や感謝」だけではなく、もう少し深みのある内容にしていきたい。
- ・ 「自助」や「共助」について書かれている印象を持ったが、「支え合う生活」を実現するためには「公助」が非常に重要な場面もかなり多いと感じる。行政として、どのような姿勢で市民の生活を支えるのかが明記されていると市民の安心につながる。

第三節 (3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える（64件）

○ その他の御意見

- ・ 市民ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合うことはとても重要であると自分自身も考える。個性や価値観を尊重し合うことで、市民が住みやすいと感じる街づくりにつながる。
- ・ 京都は他のどの都道府県と比べても外国人と関わる機会や出会う機会が多く、文章中にあるように身体的特徴による差別などについて考えることがよくある。京都に住んでいるからこそ「自分」とは何か、世界中の人がどうしたら対等に過ごせるのかについて、これからさらに深く考えていきたいと思った。
- ・ 「互いを認め合いながら、自分の「居場所」と「出番」を見つけて日々を享受できるまちをつくっていく」というところが、今の京都に必要なと思うし、地域間との交流などの中で、お互いのことを尊重し合うことが大切だと改めて感じる事ができた。
- ・ 観光客が増えている分、京都に住んでいる人の生活に負担がかかっている（バスが混んでいるなど）。しかし、だからといって外国の人を敵視するのではなくて、両者が尊重し合うことが大切だ。
- ・ インバウンドの増加や海外事業者が営む施設の増加は、様々な恩恵もあると思うが、京都に住まう者として、文化の違いを受け入れるだけでなく、良い京都を守るためにも、文化を受け入れていただく、そのためのルールも必要だと考える。
- ・ 現代は個性が認められてきているが、それでもまだまだ差別や偏見は残っている。人目を気にして個性を消す人もたくさんいる。そんな中でみんなが個性を出して認め合える自分の「居場所」と「出番」を見つけていくというのはとても良いことだ。
「心を育み」とあるが、その心を育める環境というのは人によって違うと思う。しかし、子どもたちにとってどんな環境なら良いのかは分からない。差別や偏見をしない、互いを認め合う心をみんなが育むにはどうしたら良いのだろうか。
- ・ 性別、国籍に対して就労や社会参加の取組はわかるが、性自認や性的思考に対して市がどのような取組をするのかが気になる。
- ・ 何でも受け入れる、許容することは尊重とは言わない。

6 「第五章 わたしたち京都市民のこれから」に対する意見（140件）

○ 答申案に反映させていただいた御意見

- ・ 「公・共・私のあわいを…」に、地域企業を含めていただきたい。「多義的な市民性」を支えるのは、それを受け入れる地域企業でもある。市民のみに使命感を求めるのではなく、受け皿としての地域企業に対する期待も入れていただきたい。
- ・ 「転居後」という表現は転出にも転入にも使えるので、ここでは「転出後」とした方が良い。

○ その他の御意見

- ・ 「他方で…」以後の文章がすばらしいと感じた。いろんな意見が出てくると思うが、変えなくて欲しい。
- ・ 京都に住んでいる方々の団結力が強く、外から来た人は輪に入りにくいと感じていたが、京都市をより良いまちにするためにも、様々な人で関わるができる環境になってほしい。
- ・ 何よりも大切なのは、市民一人ひとりがこのまちの未来を「自分ごと」として捉えることだ。地域で話し合い、課題を共有し、小さな行動から取組を始めること。行政と市民、そして世代と世代が手を取り合いながら、京都の未来を共に築いていく姿勢が、今まさに求められている。京都の強みは、伝統を大切にしながらも、新しいものを柔軟に受け入れてきた「しなやかさ」にある。その精神を胸に、わたしたち京都市民がこれからの時代を前向きに、力強く歩んでいくことこそが、何よりも大切なのではないのだろうか。
- ・ 京都市民がこの歴史と現状をしっかりと認識したうえで、京都を愛する京都市民以外の人も議論して、これからの世界文化自由都市宣言の理想を実現しようとする提案はすばらしい。
- ・ 私は今年7月をもって約8年間お世話になった京都市を離れ、故郷の鳥取市にUターンした。その私が広義の京都市民に含まれるのは大変ありがたい。「物理的・時間的な隔たりを超えて京都市と関わり続けていける仕組み」に期待し、鳥取市からでもお世話になった京都市に何か貢献したい。広義の京都市民という意味では、来訪する外国人もとても大切だ。京都を訪れる外国人が単なる観光に終わらず、能動的に京都市と関わってイける仕組みづくりにも期待する。
- ・ 近年では進学就職に伴う単身者の流入も増えている。市外の人々の役割は記載されているが、単身世帯など外部からの流入者についての役割もしっかりと書き込んだ方が良い。
- ・ 京都市民がめざすまちのすがたを実現するために、京都市民はどうしていくべきなのかが長くてよくわからなかった。
- ・ 市民団体や行政のことを書かれても、実際に市民がどのように動けばいいかわからないため、京都市の発展に参加出来ていない感じがする。
- ・ 今後、「市民と行政がどのような形で協働していくのか」という方向性が少しでも示されると、構想全体がより現実的に、また行動につながるものとして受け止められるようになるのではないかな。

7 「未来への問いかけ」に対する意見（92件）

○ その他の御意見

- ・ 日々、京都市民が心のどこかで思っていたことを記すことができている良い。
- ・ 現時点で生まれている問題はもちろん、これから生まれる大小長短様々な問題をともに考えていながら、構想を基礎に自身たちで京都を拓いていくというイメージが湧く。そして個人はもちろん、行政ともより密接に関わる機会も増やしていきながら考えられると良い。
- ・ 今まで続けて来たまちを継承していく中で、同じようにつづけていけない問題や変化が生じてしまうため、今後はどのように継承していくのか少しずつ変えていかなければならないのだろう。
- ・ 私たち市民一人ひとりの内面に働きかける非常に重要なメッセージであると受け止めている。特に「どんな京都を未来に手渡したいか」「あなたにとっての文化とは何か」「京都の公共とは何か」といった問いは、福祉・看護の現場で“生きること”を支えている私たちにとっても、常に問い続けてきたテーマである。
- ・ 世界とつながりながら京都の人間の遺産や伝統や文化を継承していくためには、理解してもらう必要があるので、京都市民がまず一番の理解者になる必要があると思った。
- ・ 政治が耳あたりの良い言葉ばかりを追い求める中で、世の中の課題は、そんなに単純に解決策が示せるものではないことを記載していることは良いと思う。
- ・ 自らの生活に精一杯、文化を楽しむ余裕のない人を、排除するような京都にはなってほしくない。ぜひ、そういった人を「弱い立場の人」と言い切ってしまうず、「わたしたち京都市民」の主語の一人としてほしい。
- ・ 京都というまちに国籍も含め多様な人材や事業者を集めて、それが混ざり合って長年の文化をイノベティブに変え、新しいものをどうやって作っていくのか。従来のコミュニティがバラバラになりつつある中、まだ京都にはコミュニティの力が残っているので、どうやってそのコミュニティを再編するのが課題である。
- ・ 基本構想の「京都（市を削除したこと）」に重要な意味があるとしたら、この未来に関する記述で触れた方が締まると思う。まとめの部分で、この基本構想の大事なキーワード（例えば、学藝、学藝の府、京都学藝衆、響創など）が入っていないのがもったいないと感じた。
- ・ 「理想の宣言はやさしく、その実行はむずかしい。」全くその通りである。だが、これから25年間この「京都基本構想（仮称）」の下で、市政と市民が一体となって行動していくためには、25年後の理想の京都の姿を共有してこそ初めて実現していくことができる。
そのためには、第三章であげられている課題の数々について、具体的な対策を各地域の市井において討議され検討されるべきであって、その討議の場を市民にだけ任せるのではなく行政が積極的に場を提供していくべきであると考えます。
- ・ 「技術革新が人間同士の生身のつながりを収奪」とあるが、収奪ではなく、新たな生身の人間のつながりへ導くとは考えられないのか。両者は対立するものではないと思う。
- ・ 「本基本構想は…拠り所にすぎず」という表現では、基本構想が軽いものに思えてしまう。

8 「策定後、様々な方々に広めていくための活用の仕方」に対する意見（201件）

○ 主な御意見

- ・ SNSを通じての情報発信
- ・ 学校の教材にするなど、教育現場での活用
- ・ 学校、イベント、地域の集会等に職員が直接出向き説明（ワークショップや講座等の開催）
- ・ 簡潔に分かりやすくまとめた概要版等の作成
- ・ ポスターなどの広報物を作成し、市内各所に掲示

（参考）

活用の仕方	件数
① SNSの活用	49
② 学校（教育現場）での活用	33
③ ワークショップの開催	21
④ やさしい版の作成	20
⑤ イベントでの周知	14
⑥ ポスターの掲出	13
⑦ テレビ・新聞の活用	12
⑧ 意見募集の機会	11
⑨ バス・地下鉄車両への掲示	11
⑩ 多言語版の作成	10
⑪ 広告の活用	10
⑫ 駅等への掲示	10
⑬ キャッチコピーの作成	9
⑭ 動画の作成	8
⑮ 企業との連携	7
⑯ 市民しんぶんへの掲載	6
⑰ 冊子の作成	6
⑱ チラシの作成	5
⑲ 各戸への配布	4
⑳ 回覧板の活用	3
㉑ ラジオの活用	2
㉒ インフルエンサーの活用	2
㉓ その他	44

※ 1つの意見の中で複数の活用方法を提案いただいている場合があるため、意見数とは一致しない。

9 その他の意見（144件）

- ・ 簡単に解決できない問題があるからこそ、私たち現代の人がしっかり向き合うべき課題があると改めて感じた。
- ・ 「京都」について、これまでの評価、また、これからの方向性について、地元の皆様の御意見等を踏まえてまとめられたものであることがうかがえ、京都に縁もゆかりもない者にとっては、大変勉強になるものと感じている。
- ・ 基本構想は、京都が未来に向けて何を大切にし、どこへ向かうのかという「都市としての志」を丁寧に言語化されたすばらしい取組だと感じている。
- ・ 2050年の京都がどうなっているか。共通テーマはこれぐらい曖昧なものからスタートして、それに対してみんなで考える。本音で語り合えて、京都市の行政に反映される、そういう心理的安全性が担保されたダイアログ（対話）の場としてのタウンミーティングやプロジェクトを、恐れずに公募型でやってみる。それが2050年の京都市を作る最初の一步になるのかもしれない。
- ・ この基本構想は、全体としてすばらしい内容だと思う。特に、学藝、学藝の府、京都学藝衆、響創というような新しい言葉は大事にしてほしい。
- ・ 他の市の基本構想を見ると、極端なことを言えば、市の名前を置き換えても大きな違和感なく読めるものが一定数あると思うが、京都市がいま作っている基本構想は他の市に置き換えることはできない、一目でこれは京都市だとわかるものであり、とても良いと思った。
- ・ 京都基本構想（仮称）は、「市民が問いから始め、共創し、未来につなぐまちづくり」という理念を掲げており、30年という長期を見据えた構想として高く評価できる。特に、伝統文化や自然資源の継承という「京都らしさ」を支える理念は、この構想の中核として今後もぶれずに維持すべき軸であると考えている。
- ・ 自治体の計画や構想という類は、行政がアリバイ的に書くものだと思っていたがこれはなかなか面白い。自治体の構想でありながらグローバルな視点に立っているところがすごい。
- ・ 哲学的な抽象表現を用いることで、あえて答えを出さず市民が入りこんでいく形になっている点は良いと感じたが、市民全体に構想を共有する過程では「読み取りづらい」と捉えられてしまうかもしれない。
- ・ （全体的に文が難しいので）市の未来を担うであろう子どもたちにも分かるような、別タイプの物があれば良いと思った。
- ・ 独特な言い回しや言葉の使い方が特徴的な文章であり、難しいと思う。第四章で記されている「わたしたち京都市民がめざすまち」を実現するために、行政は何をするのか、市民は何をするのか、ということを別の場面や手段で分かりやすく示していく必要があると思う。

- 京都の理解者を増やして伝統を守るという強い意思を感じたが、京都市が京都府・日本・世界に対してどのような役割を果たしていくのかという点について、もう少し具体的に構想を持つべきではないかと思った。京都へのコミットを求めるだけでなく、京都が他地域に対して何らかの還元をなす姿勢も大切だと考える。
- もう少しやさしい言葉で説明された要約版や図解、具体例を交えた説明があると、より多くの市民が内容を理解し、自分ごととして意見を持てるようになると思う。
市民とともにまちづくりを進めるという視点からも、「伝わる言葉」での情報提供を今後検討いただきたい。
- 全体的に、難しい言葉が多い。古き良い京都を示すには素晴らしい言葉だが、小学生や中学生や高校生、大学生、若年層の大人達、未来を創る力がある世代からすると、もう少しわかりやすい言葉で示されていると、「私たちの住む京都がこの方向性を向いているから、この意見を提出しよう」と興味を持って回答しやすくなる。
- 全体的には、人の暮らしの中にある苦しみや悲しみに焦点を当てた記述が少なく、感情移入の難しい文章だと感じた。
- これまで京都市基本構想だったものをあえて、京都基本構想と名称変更する理由が不明。京都には、府や京都市以外の市町村があり、名称変更により誰に向けての構想かも不明確になる。